

リトアニア語のヴォイス表現

櫻井 映子

はじめに¹

リトアニア語においては、能動と受動の対立に限定される狭義のヴォイス(態)は、基本的に、動詞ではなく分詞の形態論的カテゴリーである²。リトアニア語の形容詞的分詞のうち、現在/過去/未来分詞には、能動態と受動態の区別がある。受動文は、動詞 būti “ある、いる、～である”の活用形と、現在受動分詞(接尾辞 -m- をともなう)あるいは過去受動分詞(接尾辞 -t- をともなう)の主格形を組み合わせた分析的形式によってつくられる。受動文において、動詞 būti は主語の人称と数に一致し、時制を表す。一方、受動分詞は主語の性と数に一致する。現在受動分詞と過去受動分詞はアスペクト的意味の違いによって使い分けられる。また、リトアニア語の受動文は、自他の別にかかわらずすべての動詞からつくられ³、能動文とこれらの受

¹ リトアニア語は、バルト海東岸に位置するリトアニア共和国の公用語で、話者の数は約 330 万人である。姉妹語のラトヴィア語とともにインド・ヨーロッパ語族のバルト語派に属している。古い屈折組織や自由アクセントをよく保持しており、インド・ヨーロッパ語族の諸現代語中でも最も古風な言語の一つに数えられている。名詞類は7つの格(主格、属格、与格、対格、具格、位格、呼格)と2つの性(男性、女性)を区別し、動詞は3つの人称(1・2・3人称)と2つの数(単数、複数)を区別する。語順はかなり自由であるが、優勢な語順はSVOで、典型的な他動詞構文では、主語は主格、直接目的語は対格を取る。間接目的語は与格を取り、直接目的語より前に置かれる傾向がある。

² リトアニア語は、分詞の種類と形態が非常に豊富な言語である。分詞は、形態によって以下のように大別される。

- (a) 分詞(形容詞的分詞): 性・数・格により変化する。能動態と受動態がある。現在/(一般)過去/習慣過去/未来能動分詞、現在/過去/未来受動分詞、必要分詞がこれに属する。
 (b) 半分詞: 性・数により変化する(主格形のみ)。能動態のみで受動態をもたない。
 (c) 副分詞(副詞的分詞): 不変化する。能動態のみで受動態をもたない。現在/過去/習慣過去/未来副分詞がこれに属する。

形容詞的な分詞は、基本的に、定語的、半述語的(状況語的・補語的)、および、述語的機能をもつ。半分詞と副分詞は、半述語的機能のみをもつ。

³ 受動文の動作者(あるいは経験者)は属格で表される。自動詞からつくられた受動文では、動詞 būti があまり用いられないこと、受動分詞が中性形を取ることを特徴とする。自動詞の受動文は、間接的に得た情報、結果からの推論、仮説、伝聞などの証拠的 evidential な意味を表す。

例. Pažiūrėk, čia jo sėdėta.

見る.IMP.3 ここに 彼.3M.SG.GEN 座っている.PAST.PASS.P.N

‘見る、彼はここに座っていたのだ。’

本稿で用いる略号は以下の通り: ACC accusative (対格); ACT active (能動態); ADJ adjective (形容詞); ADV adverb (副詞); DAT dative (与格); F feminine (女性); FUT future (未来); GEN genitive (属格); IMP imperative (命令法); INF infinitive (不定詞); INS instrumental (具格); M masculine (男性); N neuter (中性); NOM nominative (主格); P participle (分詞); PASS passive (受動態); PL plural (複数); PRES present (現在); SG singular (単数)。なお、例文中の記号[?], [??], [*]は、それぞれ、インフォーマントの判断による「不自然な文」、「きわめて不自然な文」、「非文法的な文」の区別を示す。また、括弧{}は置換可能であることを示す。

動文の間の意味論的な対応関係は、アスペクトやテンスとも相関して、非常に複雑な様相を呈している。なお、伝統文法 (LK_G, DLK_G, LG) のように、動詞 būti と能動あるいは受動分詞を組み合わせた形式を動詞の人称変化形のパラダイムに含め (伝統的に「複合テンス compound tense」と呼ばれる)、狭義のヴォイスを動詞の形態論的カテゴリーとみなす立場もある。

また、ロシア語などと同様に、リトアニア語では、派生的な使役動詞や再帰動詞が盛んに用いられるが、伝統文法には、使役や再帰などを含む広い意味でのヴォイスに関する体系的な記述はなく、動詞の形態論の中で個別に扱われるに留まる。とりわけ、使役については、自動詞と他動詞の派生的な関係に関して「意味論的な使役的対立 semantic causative opposition を表す」と言及される程度である (LG: pp223-227)。一方、再帰動詞については、形態や意味に関するより詳しい記述がある。語彙的あるいは派生的な使役動詞による表現の他に、リトアニア語では、「命じる」、「強いる」などの意味をもつ動詞を他の動詞に添えて使役を表すこともある。また、リトアニア語の派生的な再帰動詞の表す意味は多岐にわたり、自分に対する動作 (行為) という文字通りの再帰 (reflexive) の他、相互 (reciprocal) の意味、自己利益 (benefactive)、自発 (spontaneous)、自然な感情の状態 (広義の自発に含まれる) などを意味領域とするが、受動の意味を表さない。再帰辞 -s(i)- は、他のインド・ヨーロッパ諸現代語に於けると同様に再帰代名詞に由来するが、人称変化しない点でフランス語などと比較してより文法化している。

概して、ヴォイスはテンス、アスペクト、モダリティ的な意味と複雑に絡み合っており、リトアニア語のヴォイス研究では、テンス・アスペクト・ムード諸形式の機能および意味との関係を分析する必要があることはすでに指摘されている (LK_G, DLK_G, LG, Paulauskienė 1979, Ambrazas 1984, Geniušienė & Nedjalkov 1988, Geniušienė 1990 他)。だが、最近のごく一部の研究 (Holvoet & Judžentis 2003, Holvoet & Semeniene 2004, Holvoet & Mikulskas 2005) を除いて、ヴォイスと動詞の項構造の問題に関しては、これまであまり言及されておらず、課題が多く残されている。リトアニア語では、一般的に、非典型的な (すなわち、より自動詞に近い) 他動詞の場合に直接目的語がしばしば対格以外の格を取るが、使役表現の場合も、動詞によって、被使役者 (causee) は対格以外の格 (主に与格) を取る。また、不定量の主語あるいは直接目的語は、原則として属格を取る他、よく知られるように、否定形他動詞の直接目的語および存在否定文の主語は必ず属格を取る。さらに、心理的・生理的経験、感情・感覚、必要、欲求・願望などを表す述語は、しばしば主格以外の格 (主に与格あるいは属格) を取る。

それでは、以下に、アンケートの項目に従って、リトアニア語のヴォイス表現を解説する⁴。

自動詞・他動詞の対

まず、リトアニア語の自動詞・他動詞は形の上で区別されることが多く、自他同形の例は少

⁴ インフォーマントとして協力していただいたユルギタ・ポロンスカイトー Jurgita Polonskaitė 氏 (実践女子大学大学院博士後期課程) に心よりお礼申し上げます。なお、アンケート項目に従って作成した原稿の構成上、詳しく解説することが出来なかった点については、参考文献を参照されたい。

ない(例. *degti* “燃える, 燃やす”, *virti* “煮える, 煮る”). 自動詞と他動詞の対は, 派生関係のタイプに従って, 以下のように分類できる (LG: p223):

- [1] 動詞語幹内の母音 (および子音) 交替による対
(例. *kilti* “起きる, 起こる” – *kelti* “起こす”)
- [2] 自動詞とこれに使役の接尾辞 *-(d)in-* あるいは *-(d)y-* を付加して形成された派生的な他動詞の対
(例. *pykti* “怒る” – *pykdyti* “怒らせる”)
- [3] 自動詞とこれに接頭辞を付加して形成された派生的な他動詞の対
(例. *verkti* “泣く” – *praverkti (akis)* “(目を) 泣きはらす”)
- [4] 他動詞とこれに再帰辞 *-s(i)-* を付加して形成された派生的な自動詞の対
(例. *keisti* “変える” – *keistis* “変わる”)

櫻井&ポロンスカイターの「リトアニア語の自他動詞のリスト」⁵では, リストに挙げた全 853 個の動詞のうち有対動詞は 340 ペア 680 個, 残りの 173 個の動詞は無対である. また, 自他同形は全 853 個の動詞中 8 ペア 16 個, 中間的な動詞は 56 個である. 自動詞と他動詞の間に派生関係がある対は, [1] 動詞語幹内の母音 (および子音) 交替による対が 35 ペア 70 個, [2] 自動詞とこれに使役の接尾辞を付加して形成された他動詞の対が 144 ペア 288 個, [3] 自動詞とこれに接頭辞を付加して形成された他動詞の対が 17 ペア 34 個, [4] 他動詞とこれに再帰辞を付加して形成された自動詞の対が 108 ペア 216 個ある.

上の自動詞と他動詞のリストにおける対の個数からみて, [2]の使役の接尾辞 *-(d)in-* あるいは *-(d)y-* の付加は自動詞から他動詞を派生するための最も生産的な方法であり, [4]の再帰辞 *-s(i)-* の付加は他動詞から自動詞を派生するための最も生産的な方法であるといえる. 以下の例文(1)は, 再帰の自動詞 *atsidaryti* “開く”と他動詞 *atidaryti* “開ける”, および, 自動詞 *išdužti* “割れる”と使役の他動詞 *išdaužyti* “割る”⁶の例である.

(1a) 《風などで》ドアが開いた. 窓が割れた.

Durys *atsidarė.* *Langai* *išdužo.*

ドア.F.PL.NOM 開く.PAST.3 窓.M.PL.NOM 割れる.PAST.3

⁵ 筆者とユルギタ・ポロンスカイターが, 平成 22~25 年度国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語構造の意味範疇の普遍性と多様性」(研究代表者: プラシャント・バルデン) の補助を得て作成した, リトアニア語の自他動詞のリストである. このリストは, リトアニア語の基本語彙の動詞を辞書から抽出して自他動詞の区別を付したリストをまず作成し, これをもとに, 自他動詞の対の派生関係を明示したリストを作り直すという手順で作成したものである. リストでは自他同形の動詞は有対として扱っている. また, 補充法による対を含まないので, これを加えた改訂版を現在作成中である.

⁶ 自動詞 *išdužti* “割れる”と対をなす使役動詞には, 例文(1)で用いた *išdaužyti* “割る”の他に, *išdaužti* “割る”もある. 典型的には, *išdaužyti* は対象(例文(1)では「窓」)が複数の場合に使われ, *išdaužti* は対象が単数の場合に使われる.

(1b) (彼が) ドアを開けた。(彼が) 窓を割った。

(Jis) atidarė duris. (Jis) išdaužė langus.
彼3M.SGNOM 開ける.PAST.3 ドア.F.PL.ACC 彼3M.SGNOM 割る.PAST.3 窓.M.PL.ACC

(1c) 入口のドアが開けられた。

Įėjimo durys buvo atidarytos.
入口のドア.F.PL.NOM be.PAST.3 開ける.PASS.PAST.P.F.PL.NOM

窓が割られた。

Langai buvo išdaužyti.
窓.M.PL.NOM be.PAST.3 割る.PASS.PAST.P.M.PL.NOM

使役

語彙のおよび派生的使役動詞の場合、語彙や文脈によって、「直接使役」または「間接使役」のいずれかの解釈が可能である。例文(2a)を参照。一方、リトアニア語では、英語などと同様に、他の意味をもつ動詞を使役助動詞（他の用語法ではこれも「使役動詞 causative verb」と呼ばれるが、ここでは混乱を避けるため、「使役助動詞」という用語を採用する）として使うこともある。このタイプの動詞として代表的なものに、使役者の意志・意図を示す「強制使役」を表す *liepti* “命じる”（被使役者：与格）、*priversti* “強いる、強制する”（被使役者：対格）や、被使役者の行動を許す「許可使役」を表す *leisti* “許す”（被使役者：与格）などがある。これらの動詞に他の動詞を添えた分析的な使役表現は、基本的に「間接使役」である。例文(2b, c)を参照。なお、これらの使役助動詞を用いた使役構文では、使役助動詞の直後に被使役者を表す語を置く語順「使役者（主語）＋使役助動詞＋被使役者（目的語）＋不定詞（＋不定詞の目的語）」が一般的である。

(2a) 私は（自分の）弟を立たせた（起立させたのではなく、立っている状態にさせたの意）。

Aš pastačiau (savo) brolių.
私.1.SGNOM 立たせる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SG.ACC

(2b) 私は（自分の）弟を立たせた（私は弟に立っているよう命じた）。

Aš liepia (savo) broliui stovėti.
私.1.SGNOM 命じる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SG.DAT 立つ（立っている）.INF

(2c) 私は（自分の）弟を立たせた（私は弟を立っているよう強いた）。

Aš priverčiau (savo) brolių stovėti.
私.1.SGNOM 強いる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SG.ACC 立つ（立っている）.INF

ちなみに、「私は（自分の）弟を立ち上がらせた（起立させた）」の意であれば、下の例文(2b', c')

⁷ *brolis* “兄弟”は“兄”でも“弟”でもあり得る。*vyresnis brolis* “兄（年上の兄弟）”および *jaunesnis brolis* “年下の兄弟”という表現もあるが、リトアニア語では一般的に両者を取り立てて区別することはしないので、本稿の例文でもそのようにする。

のように使役助動詞を用いて表され、語彙的あるいは派生的な使役動詞は用いられない。

(2b) 私は(自分の)弟を立たせた(私は弟に立ち上がるよう命じた)。

AŠ liepiau (savo) broliui atsisoti.

私.1.SGNOM 命じる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SGDAT 立つ(立ち上がる).INF

(2c) 私は(自分の)弟を立たせた(私は弟を立ち上がるよう強いた)。

AŠ priverčiau (savo) brolij atsisoti.

私.1.SGNOM 強いる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SGACC 立つ(立ち上がる).INF

他動詞の使役

分析的使役構文では、目的語の取る格は使役助動詞によって決まっており、他動詞の使役表現の場合には対格が重複することもあり得る。日本語のように二重対格を避けるために別の格を用いるということはない。priversti「強いる、強制する」の例文(3)を参照。なお、リトアニア語では、dainuoti「歌う」は、例文(3a)のように、直接目的語(対格)を取ることも可能だが、日本語の「歌を歌う」の意味を表すには、例文(3b)のように、直接目的語を取らない方が自然である⁸。よって、典型的な他動詞である išdaužyti「割る」の例文(3c)も参照されたい。ちなみに、dainuoti「歌う」から派生された使役動詞 dainuodinti「歌わせる」の使用は一般的ではない。

(3a) 私は(自分の)弟に歌を歌わせた(私は弟を歌を歌うよう強いた)。

AŠ priverčiau (savo) brolij dainuoti dainą.

私.1.SGNOM 強いる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SGACC 歌う.INF 歌.F.SGACC

(3b) 私は(自分の)弟に歌を歌わせた(私は弟を歌うよう強いた)。

AŠ priverčiau (savo) brolij dainuoti.

私.1.SGNOM 強いる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SGACC 歌う.INF

(3c) 私は(自分の)弟に窓を割らせた(私は弟を窓を割るよう強いた)。

AŠ priverčiau (savo) brolij išdaužyti langus.

私.1.SGNOM 強いる.PAST.1.SG 自分の 兄弟.M.SGACC 割る.INF 窓.M.PLACC

一方、自他の点で中間的な動詞あるいは他動詞に、使役の接尾辞を付けて派生動詞をつくることは可能だが(valgyti「食べる」-valgydinti「食べさせる、養う」、gerti「飲む」-girdyti「飲ませる、水をやる」、siūti「縫う」-siūdinti「縫わせる」)、自動詞からの派生に比べて非生産的である(この点に関する具体的な数量的データはこれまで発表されていないので調査の必要がある)。たとえば、例文(3)の dainuoti「歌う」-dainuodinti「歌わせる」の場合のように、派生的な使役動詞が存在しても、その使用が一般的でないこともある。また、このタイプの派生動詞の場合、被使役者かあるいは動作の対象のいずれかを対格で表す。例文(3d, e)を参照。概して、派

⁸ 注5で触れたリトアニア語の「自他動詞のリスト」(櫻井・ポロンスカイトー)では、dainuoti「歌う」は、valgyti「食べる」、gerti「飲む」などととも、「中間的な動詞」(他の用語で「半他動的動詞 semi-transitive verbs」)に分類している。

生的な使役動詞は二重目的語を取りにくく、被使役者と動作の対象の両方を示す方法は限定的である。動作の対象は例文(3d')のように具格に降格することが多い (Savičiūtė 1985)。よって、他動詞の使役表現の場合、分析的な使役構文の方が広く用いられる。

(3d) 母は子供に食べ物を食べさせている (養っている)。

Mama valgydina vaiką.
母.F.SGNOM 食べさせる.PRES.3 子供.M.SGACC

(3e) 母はドレスを縫わせた。

Mama pasiūdino suknelę.
母.F.SGNOM 縫わせる.PAST.3 ドレス.F.SGACC

(3d') 母は子供にパンを食べさせている (パンで養っている)。

Mama valgydina vaiką duona.
母.F.SGNOM 食べさせる.PRES.3 子供.M.SGACC パン.F.SGINS

強制使役と許可使役

前述の通り、使役者の意志・意図を示す「強制使役」と被使役者の行動を許す「許可使役」は、それぞれ異なった使役助動詞を用いることによって表し分けられる。liepti “命じる”を用いた「強制使役」の例文(4a)、および, leisti “許す”を用いた「許可使役」の例文(4b)を参照。

(4a) 母は子供にパンを買いに行かせた (母は子供にパンを買いに行くよう命じた)。

Mama liepė vaikui nueiti nupirkti duonos.
母.F.SGNOM 命じる.PAST.3 子供.M.SGDAT 行く.INF 買う.INF パン.F.SGGEN

(4b) 母は子供を遊びに行かせた (母は子供に遊びに行くことを許した)。

Mama leido vaikui eiti žaisti.
母.F.SGNOM 許す.PAST.3 子供.M.SGDAT 行く.INF 遊ぶ.INF

直接使役と間接使役

語彙的意味によって使役を表す他動詞の中には、「直接使役」しか表現できないものがある。例文(5a)の aprengti “着せる”は、基本的に、直接手を下して服を着せることを意味する。一方、この他動詞から再帰辞を付けて形成される再帰の自動詞 apsirengti “着る”の使役表現では、例文(5b)のように、liepti “命じる”(被使役者：与格)、priversti “強いる、強制する”といった使役助動詞を添えるが、これらは、基本的に「間接使役」の表現となる。

(5a) 私は弟に服を着せた。

Aš aprengiau brolių.
私.1.SGNOM (服を) 着せる.PAST.1.SG 兄弟.M.SGACC

(5b) 私は弟にその服を着させた。

Aš liepiu broliui apsirengti tais rūbais.

私.1.SGNOM 命じる.PAST.1.SG 兄弟.M.SGDAT 着る.INF それらの服.M.PL.INS

Aš priverčiau broliį apsirengti tais rūbais.

私.1.SGNOM 強いる.PAST.1.SG 兄弟.M.SGACC 着る.INF それらの服.M.PL.INS

授受

授受表現に関しては、リトアニア語には、基本的な授受動詞として、*duoti* “与える” および *gauti* “得る” がある。いずれも、日本語の “やる”, “あげる”, “くれる”, “もらう” といった授受動詞のような恩恵の意味は含まず、恩恵の点では中立的な動詞である。*duoti* “与える” を用いた例文(6a, b), および, *gauti* “得る” を用いた例文(6c)を参照。

(6a) 私は弟にその本をあげた (私は弟にその本を与えた)。

Aš daviau broliui tą knygą.

私.1.SGNOM 与える.PAST.1.SG 兄弟.M.SGDAT その本.F.SGACC

(6b) 兄は私にその本をくれた (兄は私にその本を与えた)。

Brolis man davė tą knygą.⁹

兄.M.SGNOM 私.1.SGDAT 与える.PAST.3 その本.F.SGACC

(6c) 私は兄にその本をもらった (私は兄からその本を得た)。

Aš gavau tą knygą iš brolio.

私.1.SGNOM 得る.PAST.1.SG その本.F.SGACC ~から兄弟.M.SGGEN

やりもらい

同様に、リトアニア語には、日本語のやりもらい表現に相当するような区別がない。従って、以下の例文(7)の、日本語のやりもらい表現に相当するリトアニア語の表現は、*duoti* “与える” や *gauti* “得る” といった授受動詞を用いないという点においては、例文(6)の授受表現との直接的な関連はない。ただし、動作者 (主語) の行為を恩恵として受ける者、すなわち、受益者が与格で表される点は共通している。換言すれば、例文(7)のタイプの構文は、概して、受益者 (与格) に利益や何らかの影響を与えない行為は表しにくい。

(7a) 私は弟に本を読んであげた (私は弟に本を読んだ)。

Aš perskaičiau broliui knygą.

私.1.SGNOM 読む.PAST.1.SG 兄弟.M.SGDAT 本.F.SGACC

⁹ リトアニア語の基本語順は SVO だが、代名詞の目的語は動詞の前に置かれる傾向がある。

(7b) 兄は私に本を読んでもらった (兄は私に本を読んだ).

Brolis man perskaitė knyga.

兄.M.SGNOM 私.1.SGDAT 与える.PAST.3 本.F.SGACC

(7c) 私は母に髪の毛を切ってもらった (母は私に髪の毛を切った).

Mama man nukirpo plaukus.

母.F.SGNOM 私.1.SGDAT 切る.PAST.3 髪の毛.M.PLACC

ちなみに、上の例文(7)の表現に duoti “与える”などの授受動詞を加えると、例文(7a', b')のように目的の意味を表す表現になる。

(7a') 私は弟に本を読むためにあげた (与えた).

Aš daviau broliui perskaityti knyga.

私.1.SGNOM 与える.PAST.1.SG 兄弟.M.SGDAT 読む.INF 本.F.SGACC

(7b') 兄は私に本を読むためにくれた (与えた).

Brolis man davė perskaityti knyga.

兄.M.SGNOM 私.1.SGDAT 与える.PAST.3 読む.INF 本.F.SGACC

duoti “与える”は使役的な表現に用いられることもあるが、その用法は限定的である。例文(7d)を参照。

(7d) 兄は私に分からせた (理解させた).

Brolis man davė suprasti.

兄.M.SGNOM 私.1.SGDAT 与える.PAST.3 分かる.INF

なお、例文(7c)「私は母に髪の毛を切ってもらった」の意味は、例文(7c')のように受動文を用いて表すこともできる。ただし、このタイプの文では、「髪の毛」のような直接目的語を明示することはできず、常識や文脈から動作の対象が何であるかが判断される。また、一般的に、受動文のこのような使用には、語彙的な制約が大きく、概して、身体部分や所有物に対する(あるいは物を授与することを含意する)行為を表す。たとえば、例文(7b)の主語を「私」に置き換えた「私は兄に本を読んでもらった」という内容は、リトアニア語の受動文では表すことはできない。例文(7b'')を参照。

(7c') 私は母に髪の毛を切ってもらった (私は母に (髪の毛を) 切られた).

Aš buvau mamos nukirptas (*plaukus).

私.1.SGNOM be.PAST.1.SG 母.F.SGGEN 切る.PASS.PAST.P.M.SGNOM 髪の毛.M.PLACC

(7b'') 私は兄に本を読んでもらった (私は兄に本を読まれた).

??Aš buvau brolio perskaitytas (*knyga).

私.1.SGNOM be.PAST.1.SG 兄.M.SGGEN 読む.PASS.PAST.P.M.SGNOM 本.F.SGACC

再帰

リトアニア語は、古い時期のインド・ヨーロッパ語族の言語にみられる形態論的カテゴリー

としての中動態をもたないが、再帰辞 *-s(i)-* をともなう再帰動詞がこれに代わる機能を果たしている。中動態や再帰の意味を説明する際にしばしば取り上げられる「自分を洗う」の意味を表すリトアニア語の再帰動詞は、*prausti* “(体を) 洗う” に再帰辞を付加した *praustis* “自分の体を洗う” (例文(8a)の *nusiprausti* はこの *praustis* に完了的な意味をもつ接頭辞 *nu-* を付加した動詞)¹⁰である。この再帰動詞 *praustis* は、「体を」を意味する目的語なしで用いられ、一般的には体全体(全身)を洗う意味を表す。一方、手や足などの体の部分を洗う意味では、体以外の一般的物事を洗う意味も表す *plauti* “洗う” に再帰辞を付加した *plautis* “自分の体(部分)を洗う” (例文(8b, c)の *nusiplauti* はこれに完了的な意味をもつ接頭辞 *nu-* を付加した動詞) を用いるのがふつうである。前述の通り、再帰動詞の再帰辞は再帰代名詞に由来するが、ロシア語などと同様に人称変化は失っている。例文(8b, c)を参照。

(8a) 私は(自分の) 体を洗った。

Aš nusiprausiau (*kūną).
私.1.SGNOM 自分の体(全体)を洗う.PAST.1.SG 体.M.SGACC

(8b) 私は(自分の) 手を洗った。

Aš nusiploviau rankas.
私.1.SGNOM 自分の体(部分)を洗う.PAST.1.SG 手.M.PLACC

(8c) 彼は(／その人は) 手を洗った。

Jis (/Tas žmogus) nusiplovė rankas.
彼.3M.SGNOM／その人.M.SGNOM 自分の体(部分)を洗う.PAST.3 手.M.PLACC

(8)の例文で非再帰動詞を用いると、必然的に自分ではなく他の人の体を洗うことを意味する。*prausti* “(体を) 洗う” は、例文(8a')のように、「人」を表す目的語を必要とする。一方、*plauti* の目的語が、例文(8c')の「手」のように体の部分である場合、本人の手ではあり得ない。

(8a') 私は子供の体を洗った。

Aš nuprausiau vaiką.
私.1.SGNOM 体(全体)を洗う.PAST.1.SG 子供.M.SGACC

(8c') 彼は(／その人は) 彼(他の人)の手を洗った。

Jis (/Tas žmogus) nuplovė jo rankas.
彼.3M.SGNOM／その人.M.SGNOM 体(部分)を洗う.PAST.3 彼の.POSS 手.M.PLACC

自己利益

リトアニア語では、「自己利益」(benefactive)を表して目的語を取る再帰動詞が広く用いられ

¹⁰ リトアニア語では、多くの動詞に接頭辞を付けてニュアンスの異なる派生動詞をつくる。たとえば、*prausti* “(体を) 洗う” に接頭辞 *nu-* を付けた *nu-prausti* “(体を) 洗う” は、完了的な意味をもつ。この種の複合動詞から再帰動詞をつくる場合は、*nu-si-prausti* “自分の体を洗う” のように、接頭辞の直後に再帰辞 *-si-* を挿入する。

る。このタイプの再帰動詞は、とくに「自己利益」の意味を強調する必要がない場合にも用いられる。たとえば、pirkti “買う”の再帰動詞 pirktis “自分のために買う”（例文(9a)の nusipirkti はこれに完了的な意味をもつ接頭辞 nu-を付加した動詞）は非常に頻繁に用いられ、非再帰動詞 pirkti “買う”を使用すると、「自分のためでなく他の人のために買う」こと、すなわち、「自己利益」のための行為でないことを明確化することになる。したがって、誰のために買うかに言及する必要がない場合は、再帰動詞を使う方がふつうである。

(9a) 私は（自分のために）その本を買った。

Aš nusipirkau tą knygą.
私.1.SGNOM 自分のために買う.PAST.1.SG その本.F.SGACC

(9b) 私はその本を買った。

Aš nupirkau tą knygą.
私.1.SGNOM 買う.PAST.1.SG その本.F.SGACC
—それでは、いったい誰に買ったのかい？
—Tada kam gi nupirkai tą knygą?
それでは 誰に いったい 買う.PAST.2.SG その本.F.SGACC

相互的動作

リトアニア語では、「相互的動作」(reciprocal)の意味もまた、再帰動詞によって表される。ただし、再帰動詞による相互的動作の表現は、必ずしも主語が「互いに」その動作を行ったことを意味するとは限らない。また、動詞によっては本来の「再帰」など他の意味を表すこともあるので、曖昧さを避けるためには、副詞などによって相互的動作の意味を明確にする必要がある。たとえば、mušti “打つ、叩く、殴る”の再帰動詞 muštis “殴り合う、けんかする、戦う”に完了的な意味をもつ接頭辞 su-を付加した再帰動詞 susimušti は、副詞 tarpusavyje “互いに”を添えない場合、“(自分に) けがを負う”という意味も表す。例文(10a, b)を参照。なお、例文(10c)のように、非再帰動詞 sumušti “殴る”に副詞 tarpusavyje “互いに”を添えると、「殴り合う」という相互的動作の意味を表すことができないばかりか、非文になる。

(10a) 彼らは（／その人たちは）殴り合っていた（けんかをしていた、けがを負った）。

Jie (/Tie žmonės) susimušė.
彼ら.3M.PL.NOM/その人たち.M.PL.NOM 殴り合う.PAST.3

(10b) 彼らは（／その人たちは）殴り合っていた（互いに殴り合っていた）。

Jie (/Tie žmonės) susimušė tarpusavyje.
彼ら.3M.PL.NOM/その人たち.M.PL.NOM 殴り合う.PAST.3 互いに

(10c) 彼らは（／その人たちは）互いに殴っていた。

*Jie (/Tie žmonės) sumušė tarpusavyje.
彼ら.3M.PL.NOM/その人たち.M.PL.NOM 殴る.PAST.3 互いに

衆動・集合

リトアニア語には「衆動」すなわち「みな一緒に～する」という意味を表す特別な形式はなく、副詞などを用いてこれを表す必要がある。例文(11a)を参照。

(11a) その人たちは《みな一緒に》町へ出発した。

Tie žmonės visi kartu išvyko į miestą.

その人たち.M.PL.NOM みな一緒に 出発する.PAST.3 町へ

ちなみに、例文(10)に挙げた動詞の接頭辞 *su-* は、完了的意味の他に「集合・集中」の意味も表す(例. *susirinkti* “集まる, 群がる”, *sueiti* または *susieiti* “(歩いて) 集まる, 集合する”, *suvažiuoti* “(乗り物で) 集まる, 集合する”)。例文(11b)を参照。

(11b) その人たちは(乗り物で) 町へ集まった。

Tie žmonės suvažiovo į miestą.

その人たち.M.PL.NOM (乗り物で) 集まる.PAST.3 町へ

自発

また、リトアニア語では「自発」の意味もしばしば再帰動詞を用いて表される(逆使役用法を含む)。他動詞から再帰辞 *-s(i)-* を付加して派生される再帰的な自動詞の中には、「自発」の意味をもつ動詞が多くみられる(例. *baigti* “終える” – *baigtis* “終わる”, *sukti* “回す” – *suktis* “回る”, *keisti* “変える” – *keistis* “変わる”, *daryti* “する” – *darytis* “なる”)。自然に(自分の意志とは無関係に) ある種の心理的・生理的状态になることを表すときにも、このタイプの再帰動詞が広く用いられる(例. *norėti* “欲する, ～したい” – *norėtis* “((自然に) ～したくなる, (自分の意志とは無関係に) ～したい気がする”)。この場合、再帰動詞は3人称形になり、意味上の主語(経験者)は与格で表される。例文(12a, b)を参照。

(12a) その映画は泣ける(その映画を見ると(私は) 泣きたくなる)。

Tą filmą žiūrint (man) norisi verkti.

その映画.M.SGACC 見る.ADV.PRES.P 私.1.SGDAT ～したくなる.PRES.3 泣く.INF

(12b) その映画は泣ける(その映画を見ると(私は) (泣くほど) 感動的になる)。

Tą filmą žiūrint (man) darosi graudu.

その映画.M.SGACC 見る.ADV.PRES.P 私.1.SGDAT なる.PRES.3 感動的な.ADJ.N

ただし、(12)の例の「その映画は泣ける」の意味は、*verkti* “泣く” からつくられる使役動詞 *virkydyti* “泣かせる”(例文(12d)の *pravirkydyti* はこれに完了的意味をもつ接頭辞 *pra-* を付加した動詞)を用いて表現することもできる。例文(12c, d)を参照。

(12c) その映画は泣ける(その映画は泣かせるものだ)。

Tas filmas virkdantis.

その映画.M.SGNOM 泣かせる.ACT.PRES.P.M.SGNOM

(12d) その映画は泣ける (その映画は泣かせてしまう).

Tas filmas pravirkdo.
その映画.M.SGNOM 泣かせてしまう.PRES.3

意志的動作

「意志」と他動性の関係について言えば、リトアニア語では、概して、他動詞文は意志的・意図的な動作を表すのにより好んで用いられる傾向がある。だが、類型論的にみて、リトアニア語は意志性・意図性が他動詞の使用に大きく影響する言語には属さない。すなわち、他動詞文が常に意志的な動作を表すとは限らず、無意志的な動作を他動詞によって表すことは可能である。よって、意志性・意図性の有無は副詞などによって明確に表される。例文(13 a, a', b, b')を参照。一方、例文(13)の「割る」のように典型的な他動的動作を、その対象を主語とする自動詞文で表現するには、その動作が無意志的・無意図的に行われたという前提、あるいは、特殊な文脈が必要となるようである。例文(13c)を参照。

(13a) 私は卵を割った。

Aš sudaužiau kiaušinj.
私.1.SGNOM 割る.PAST.1.SG 卵.M.SGACC

(13a') 私は {わざと/うっかり} 卵を割った。

Aš {tyčia / netyčia} sudaužiau kiaušinj.
私.1.SGNOM わざと/うっかり 割る.PAST.1.SG 卵.M.SGACC

(13b) 《うっかり落として》私はカップを割った (／割ってしまった)。

Aš sudaužiau puodelį.
私.1.SGNOM 割る.PAST.1.SG カップ.M.SGACC

(13b') 私は {わざと/うっかり} カップを割った。

Aš {tyčia / netyčia} sudaužiau puodelį.
私.1.SGNOM わざと/うっかり 割る.PAST.1.SG カップ.M.SGACC

(13c) カップが割れた。でも私は何もしていない。

Puodelis sudužo. Bet aš nieko jam nedariau.
カップ.M.SGNOM 割れる.PAST.3 でも 私.1.SGNOM 何も それ.3M.SGDAT しない.PAST.1.SG

可能性と随意性

リトアニア語では、「可能／不可能」を表す文は、「随意／不随意」の違いに関わらず、「状況可能」を表すムード的助動詞の *galėti* “～できる” をともなう分析的表現によって表される。例文(14a, b)を参照。それに対して、「不随意」の「可能／不可能性」を表す場合には、しばしば再帰動詞を用いて、自然に (自発的に、自分の意志とは無関係に) ある種の心理的・生理的狀態になる (ならない) ことを表す (例. *miegoti* “眠る” – *miegotis* “ (何となく、自分の意志とは

無関係に) 眠れる”). この場合, 再帰動詞は3人称形になり, 意味上の主語(経験者)は与格で表される. 例文(14a')を参照. 一方, 随意の不可能性を表すには, 一般的に再帰動詞は用いられない.

(14a) きのお私はコーヒーを飲みすぎて(飲みすぎたので) 眠れなかった(ねつけなかった).

Vakar išgėriau per daug kavos, todėl negalėjau užmigti.

きのう 飲む.PAST.1.SG あまりにたくさん コーヒー.FSGGEN ゆえに できない.PAST.1.SG 眠り込む.INF

(14a') きのお私はコーヒーを飲みすぎて(飲みすぎたので) 眠れなかった.

Vakar išgėriau per daug kavos, todėl man nesimiegojo.

きのう 飲む.PAST.1.SG あまりにたくさん コーヒー.FSGGEN ゆえに 私.1.SGDAT 眠れない.PAST.3

(14b) きのお私は仕事がたくさんあって(たくさんあったので) 眠れなかった.

Vakar turėjau daug darbo, todėl negalėjau miegoti.

きのう もつ.PAST.1.SG たくさん 仕事.FSGGEN ゆえに できない.PAST.1.SG 眠る.INF

全体と部分

日本語でいわゆる二重主語構文で表される「全体と部分」の所有関係については, リトアニア語では, それが一時的状態, 心理的・生理的経験などを表す構文の場合には, 「全体」すなわち「経験者」が与格で表される.

(15a) 私は頭が痛い.

Man skauda galvą.

私.1.SGDAT 痛む.PRES.3 頭.FSGACC

(15b) 私は頭がくらくらする(私はめまいがする).

Man svaigsta galva.

私.1.SGDAT くらくらする.PRES.3 頭.F.SG.NOM

「全体と部分」の所有関係でも, 恒常的な状態を表す場合は, 多様な構文による表現がある. 例文(16)を参照. ただし, 「全体」にあたる語は, 例文(16a')のように, 与格では表されない. なお, 例文(16d, e)は日常会話ではまれにしか用いられない.

(16a) あの女性は髪が長い(あの女性のは長い髪).

Anos moters ilgi plaukai.

あの女性.FSGGEN 長い.ADJ.M.PL.NOM 髪.M.PL.NOM

(16a') あの女性は髪が長い(あの女性には長い髪).

*Anai moteriai ilgi plaukai.

あの女性.FSGDAT 長い.ADJ.M.PL.NOM 髪.M.PL.NOM

(16b) あの女性は髪が長い (あの女性は長い髪をもっている).

Ana moteris turi ilgus plaukus.
あの女性.F.SGNOM もつ.PRES.3 長い.ADJ.M.PL.ACC 髪.M.PL.ACC

(16c) あの女性は髪が長い (あの女性の髪は長い).

Anos moters plaukai (yra) ilgi.
あの女性.F.SGGEN 髪.M.PL.NOM be.PRES.3 長い.ADJ.M.PL.NOM

(16d) あの女性は髪が長い (あの女性は長い髪もちだ).

Ana moteris (yra) su ilgais plaukais.
あの女性.F.SGNOM be.PRES.3 ~とともに 長い.ADJ.M.PL.INS 髪.M.PL.INS

(16e) あの女性は髪が長い (あの女性は長い髪のものだ).

Ana moteris (yra) ilgu plauku
あの女性.F.SGNOM be.PRES.3 長い.ADJ.M.PL.GEN 髪.M.PL.GEN

「全体と部分」の関係にある対象への動作を表す場合、リトアニア語では、動詞の支配によって、「全体」は与格あるいは対格、「部分」は対格または前置詞句で表される。これは、自分に対する動作であっても同様である。例文(17)を参照。

(17a) 彼は (別の) 彼の肩を叩いた。

Jis paplekšnojo jam per petį.
彼3M.SGNOM 叩く.PAST.3 彼3M.SGDAT ~を通じて 肩.M.SGACC

(17a') 彼は自分の肩を叩いた。

Jis paplekšnojo sau per petį
彼3M.SGNOM 叩く.PAST.3 自分.DAT ~を通じて 肩.M.SGACC

(17b) 彼は (別の) 彼の手をつかんだ (押さえた・握った)。

Jis suspaudė jam ranką.
彼3M.SGNOM つかむ.PAST.3 彼3M.SGDAT 手.F.SGACC

(17b') 彼は自分の手をつかんだ (押さえた・握った)。

Jis suspaudė sau ranką.
彼3M.SGNOM つかむ.PAST.3 自分.DAT 手.F.SGACC

(17c) 彼は (別の) 彼の手をつかんだ (ひつつかんだ・握りしめた)。

Jis {sučiupo / sugriebė} jį už rankos.
彼3M.SGNOM つかむ.PAST.3 彼3M.SGACC ~の向こうに 手.F.SGGEN

「全体と部分」のうち、「部分」を対象にした動作であることを強調する(「部分」だけ見えて「全体」は見えないか、「部分」が「全体」から切り離されるかして、「部分」が「全体」から独立したような状態である)場合、「全体」にあたる語が属格もしくは所有代名詞で表され、「部分」にあたる語が対格を取ることがある。例文(17d)を参照。

(17d) 彼は最後の瞬間に《溺れて水の中に沈みかけていた》彼の手をつかんだ。

Jis paskutinę akimirką {sučiupo / sugriebė / suspaudė} jo ranką.
 彼.3M.SGNOM 最後の瞬間に つかむ.PAST.3 彼の.POSS 手.F.SGACC

知覚

リトアニア語では、知覚動詞 *matyti* “見る、見える” および *girdėti* “聞く、聞こえる” を用いた知覚構文は、*kaip* “どのように、いかに” に導かれる補文によって表される。例文(18a)を参照。その他、伝統文法によれば、知覚の対象を対格で表示した副分詞構文によっても表される（このような分詞の補語的機能を、伝統文法では分詞の「説明的」用法と呼んでいる）。ただし、現代リトアニア語の口語では、副分詞のこのような使用はまれである。例文(18a')を参照。なお、リトアニア語には英語などにみられるいわゆる時制の一致はなく、補文内の動詞や副分詞の現在テンスは、未完了性および主動詞に対する同時性を表す。

(18a) 私は彼がやって来るのを見た。

Aš mačiau, kaip jis ateina.
 私.1.SGNOM 見る.PAST.1.SG どのように 彼.3M.SGNOM 来る.PRES.3

(18a') 私は彼がやって来るのを見た。

Aš mačiau jį ateinant.
 私.1.SGNOM 見る.PAST.1.SG 彼.3M.SGACC 来る.ADV.PRES.P

知覚動詞以外の動詞の場合、副分詞を用いた構文はさらにまれにしか用いられない。例文(18b')を参照。一般的には *kad* “～こと” に導かれる補文（英語の *that* 構文に相当）によって表現される。例文(18b)を参照。

(18b) 私は彼が今日来ることを知っている。

Aš žinau, kad jis šiandien ateis.
 私.1.SGNOM 知る.PRES.1.SG ～こと 彼.3M.SGNOM 今日 来る.FUT.3

(18b') 私は彼が今日来ることを知っている。

?Aš žinau jį šiandien ateisiant.
 私.1.SGNOM 知る.PRES.1.SG 彼.3M.SGACC 今日 来る.ADV.FUT.P

主文と *kad* “～こと” に導かれる補文の主語が同一である場合、補文内に主語は現れないが、代名詞 *pats* “自身、自ら” によって同一指示を明確にすることも可能である。例文(19a, b)を参照。また、伝統文法では、主動詞が再帰動詞の際に、形容詞的分詞がこれと同じ主語の動作を表して補語的に機能すると記述されている。だが、やはり現代リトアニア語ではこのような分詞の用法は比較的まれであり、とりわけ再帰動詞を主動詞とした表現は口語ではあまり聞かれない。例文(19a', b')を参照。

(19a) 彼は自分（のほう）が勝つと思った。

Jis manė, kad (pats) laimės.
彼3M.SGNOM 思う.PAST.3 ~こと 自身.SGNOM 勝つ.FUT.3

(19a') 彼は自分（のほう）が勝つと思った。

?Jis manė(si) laimėsiąs.
彼3M.SGNOM (自分のことを) 思う.PAST.3 勝つ.ACT.FUT.P.M.SGNOM

(19b) 彼は自分（のほう）が勝つと言っていた。

Jis sakė, kad (pats) laimės.
彼3M.SGNOM 言う.PAST.3 ~こと 自身.SGNOM 勝つ.FUT.3

(19b') 彼は自分（のほう）が勝つと言っていた。

?Jis sakė(si) laimėsiąs.
彼3M.SGNOM (自分のことを) 言う.PAST.3 勝つ.ACT.FUT.P.M.SGNOM

全体・部分に及ぶ動作

さて、冒頭で述べた通り、リトアニア語では、一般的に、非典型的な他動詞の場合に直接目的語がしばしば対格以外の格を取る。また、不定量の主語あるいは直接目的語は原則として属格を取る他、否定形の他動詞の直接目的語は必ず属格を取る。これと関連して、動作が対象に部分的に及ぶことを意味する場合もまた、対象は属格によって表される。例文(20a)を参照。

(20a) 私は（カップの）水（の一部）を飲んだ。

Aš atsigėriau vandens (iš puodelio).
私1.SGNOM 飲む.PAST.1.SG 水.M.SGGEN ~から カップ.M.SGGEN

それに対して、動作が対象の全体に及ぶことを意味する場合は、対象は対格によって表される。例文(20b)を参照。

(20b) 私は（カップの）水を全部飲んだ（飲みほした）。

Aš išgėriau visą vandenį (iš puodelio).
私1.SGNOM 飲みほす.PAST.1.SG すべての水.M.SGACC ~から カップ.M.SGGEN

恒常性と否定

また、リトアニア語では、「恒常性」も目的語の格の選択に関わっており、恒常的あるいは習慣的な動作を表す場合、対格が用いられる傾向にある。例文(21a, a')を参照。一方、一時的あるいは非習慣的な動作を表す場合は、属格もしばしば用いられる。例文(21b)を参照。それに対して、否定文では、「恒常性」の有無に関わらず、目的語はかならず属格になる。例文(21c)を参照。

(21a) あの人は肉を食べる。

Anas žmogus valgo mėsą.
あの人.M.SGNOM 食べる.PRES.3 肉.F.SGACC

(21a') あの人は {毎日/いつも} 肉を食べる。

Anas žmogus {kasdien / visada} valgo mėsą.
 あの人.M.SGNOM 毎日/いつも 食べる.PRES.3 肉.F.SGACC

(21b) あの人は今日は肉を食べていた。

Anas žmogus šiandien valgė mėsos (/mėsą).
 あの人.M.SGNOM 今日は 食べる.PAST.3 肉.F.SGGEN (/ACC)

(21c) あの人は {今日は/毎日/いつも} 肉を食べない。

Anas žmogus {šiandien / kasdien / visada} nevalgo mėsos.
 あの人.M.SGNOM 今日は/毎日/いつも 食べない.PRES.3 肉.F.SGGEN

経験・認識

心理的・生理的経験, 感情・感覚, 必要, 欲求・願望などを表す述語は, 動詞の他, 形容詞・分詞の中性形などによっても表される。その場合も, 意味上の主語(経験者)は与格を取る。例文(22a, b)を参照。

(22a) 今日は寒い(今日は何だか寒く感じる)。

Šiandien šalta.
 今日は 寒い.ADJ.N

(22b) 私は(何だか)寒い(私には何だか寒く感じる)。

Man šalta.
 私.I.SGDAT 寒い.ADJ.N

なお, 例文(22a)の「今日は寒い」という意味をより客観的に表すのは, 次の例文(22a')のような名詞述語文である。

(22a') 今日は寒い(今日は寒い日だ)。

Šiandien šalta diena.
 今日は 寒い.ADJ.F.SGNOM 日.F.SGNOM

心理的・生理的経験, 感情・感覚などの認識を表す述語であっても, 次の例文(23a)のように, 状態ではなく, 出来事の表現であれば, 経験や認識の主体を主格主語によって表す方が一般的である。意味的な主語が与格で表された形容詞述語文の例文(23b)と比較されたい。

(23a) 私は人がとても多いのに驚いた。

Aš nustebau, kad yra tiek daug žmonių.
 私.I.SGNOM 驚く.PAST.1.SG ~こと be.PRES.3 そんなに多く 人々.F.PL.GEN

(23b) 私には人がとても多いのは驚くべきことだ。

Man nuostabu, kad yra tiek daug žmonių.
 私.I.SGDAT 驚くべき.ADJ.N ~こと be.PRES.3 そんなに多く 人々.F.PL.GEN

現象と体験

リトアニア語では、基本的に、現象を表す文において、それが現場での直接体験か否かは明示されない。例文(24a)を参照。ただし、例文(24a')のように述語動詞を分詞に置き換えることによって、文に伝聞(間接)法的な意味を加えることができる。だが、分詞のこのような用法は、現代リトアニア語の口語ではまれにしかみられない。なお、受動分詞の中性形を用いると、証拠的な evidential 意味を表すこともできる。(24b)を参照。

(24a) 雨が降ってきた。

{Pradėjo / Ėmė} lyti.
始める.PAST.3 (雨が) 降る.INF

(24a') 雨が降ってきたそうだ。

{Pradėjo / Ėmė} lyti.
始める.ACT.PAST.P.N (雨が) 降る.INF

(24b) ここには雨が降ったようだ。

Čia lyta.
ここに (雨が) 降る.PASS.PAST.P.N

自他の点で中間的な構文

自他の点で中間的な構文は、しばしば受動文で表される。例文(25 a)を参照。ちなみに、リトアニア語では「良く売れる」という表現があまり一般的ではなく、同様の意味合いで「良く買われる」という表現の方が自然に用いられる。例文(25 b)を参照。

(25a) その本は良く売れる (その本は良く売られている)。

Ta knyga gerai parduodama.
その本.F.SGNOM 良く 売る.PASS.PRES.P.F.SGNOM

(25b) その本は良く売れる (その本は良く買われている)。

Ta knyga gerai perkama.
その本.F.SGNOM 良く 買う.PASS.PRES.P.F.SGNOM

道具主語構文

一方、道具主語構文では、「道具」が動作者であるかのように、他動詞を用いることができる。例文(26a)を参照。例文(26a')のように、目的語を取ることでも可能である。また、「このナイフは良く切れる (切る)」の意で、「このナイフは鋭い」という形容詞述語文による表現も一般的である。例文(26b)を参照。

(26a) このナイフは良く切れる (このナイフは良く切る)。

Šis peilis gerai pjauna.
このナイフ.M.SGNOM よく 切る.PRES.3

(26a') このナイフは肉が良く切れる (このナイフは肉を良く切る).

Šis peilis gerai pjauna mėsa.
このナイフ.M.SGNOM よく 切る.PRES.3 肉.FSGACC

(26b) このナイフは良く切れる (このナイフは鋭い) .

Šis peilis (yra) aštrus.
このナイフ.M.SGNOM be.PRES.3 鋭い ADJ.M.SGNOM

参考文献

- Ambrasas, V. 1984. Dėl lietuvių kalbos veiksmažodžio morfologinių kategorijų. *Baltistica* 20 (2): 100-110.
- Comrie, B. 1989. *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Basil Blackwell.
- DLKG: V. Ambrasas (ed.) 1994. *Dabartinės lietuvių kalbos gramatika*. Vilnius: Mokslo ir enciklopedijų leidykla.
- Geniušienė, E. 1987. *The Typology of Reflexives*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Geniušienė, E. Š. 1990. Perfekt i vid v litovskom jazyke. In: V. S. Xrakovskij (ed.) *Tipologija i grammatika*, 135-140. Moscow: Nauka.
- Geniušienė, E. Š. & V. P. Nedjalkov. 1988. Resultative, passive, and perfect in Lithuanian. In: V. P. Nedjalkov (ed.) *Typology of resultative constructions*, 369-386.
- Holvoet, A., A. Judžentis (eds.) 2003. *Sintaksinių ryšių tyrimai*. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Holvoet, A., L. Semėnienė (eds.) 2004. *Gramatinių kategorijų tyrimai*. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Holvoet, A., R. Mikulskas (eds.) 2005. *Gramatinių funkcijų tyrimai*. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Jakaitienė, E. 1973. *Veiksmažodžių daryba*. Vilnius: Mokslas.
- LG: V. Ambrasas (ed.) *Lithuanian grammar*. 1997. Vilnius: Baltos lankos.
- LKG: K. Ulvydas (ed.) *Lietuvių kalbos gramatika*. vol.2. 1971. Vilnius: Mintis.
- Musteikis, K. 1972. *Sopostavitel'naja morfologija ruskogo i litovskogo jazykov*. Vilnius: Mintis.
- Nedjalkov, V. P. (ed.) 1988. *Typology of resultative constructions*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Nedjalkov, V. P., Silnickij G. G. 1969. Tipologija kauzativnyx konstrukcij. In A. A. Cholodovič (ed.) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij. Morfologičeskij kauzativ*. Leningrad: Nauka. 5-19.
- Nedjalkov, V. P., Silnickij G. G. 1969. Tipologija morfologičeskogo i leksičeskogo kauzativov. In A. A. Cholodovič (ed.) *Tipologija kauzativnyx konstrukcij. Morfologičeskij kauzativ*. Leningrad: Nauka. 20-50.
- Paulauskienė, A. 1979. *Gramatinės lietuvių kalbos veiksmažodžio kategorijos*. Vilnius: Mokslas.
- Rackevičienė, S. 2001. Expression of Causation in the language of the Baltic Region. *Studies in Languages* vol. 36: 74-87. Joensuu: Joensuu yliopistopaino.

- Sakurai, E. 2008. Combination of past participles functioning as adverbials with main verbs in Lithuanian: Aspect and transitivity. *Acta Linguistica Lithuanica* 59: 81-108. Vilnius: Lietuvių kalbos institutas.
- Savičiūtė, G. 1985. Parūpinamųjų veiksmažodžių semantika. *Lietuvių kalbotyros klausimai* 24: 263-251. Vilnius: Mokslas.
- Savičiūtė-Naktienė, G. 1995. Lietuvių ir kitų indoeuropiečių kalbų kauzatyvų raidos požymiai. *Lietuvių kalbotyros klausimai* 33: 110-123. Vilnius: Mokslas.
- Sližienė, N. 1969. Sudurtinių atliktinių veiksmažodžio laikų reikšmės ir vartojimas. *Lietuvių kalbotyros klausimai* 11: 19-40.
- _____. 1995. The tense system of Lithuanian. In: R. Thieroff (ed.) *Tense systems in European languages* vol. 2, 215-232. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Thieroff, R. & J. Ballweg (eds.) 1994-95. *Tense systems in European languages*. vol. 1-2. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.